

韓国の村・奄尾里の物語を読む



0 はじめに：広州郡中部面の村・奄尾里

1985年3月25日、崔仁鶴先生の案内で、小島瓊礼先生、ロバート・アダムス先生と私は広州郡奄尾里のミラウルで、初めて韓国の昔話を聞いた。

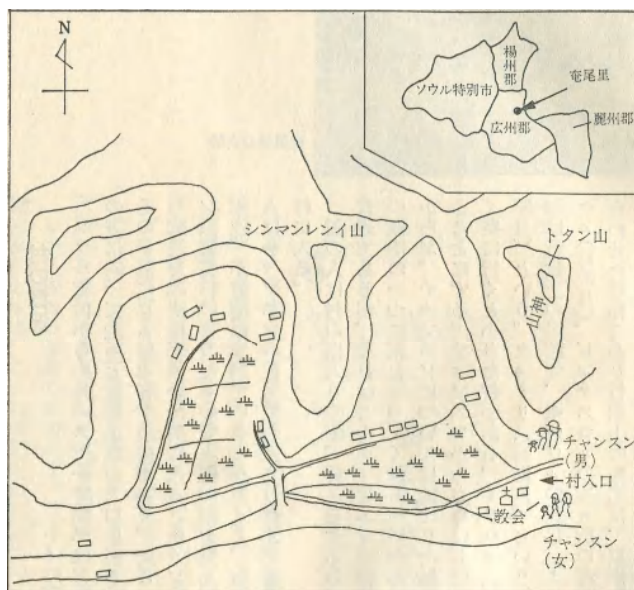
広州郡中部面奄尾里(ウンミリ)は、ビョクスコル、セマウル、ミラウルの三つの地区に分れる小さな村だが、中でもミラウルは背後にトタン山とシンマンレンイ山を控え、南側に開けた20戸程の明かい自然村である。人口は100人くらい。伝統的に農業を営んできた。

日本の村は、村共同体は、村と外の世界とをはっきりと区別する境界領域をそなえていることが多い。たとえば、かつて訪れた長野県北安曇郡白馬村飯森の場合、村境に庚申塔が立っており、村人は明確に庚申内と庚申外を区別する。庚申は周知の通り村に悪疫が入り込まぬように守る神であるが、古くからの村人は決して庚申外に家を立てない。

また7月に稲の豊かな稔りを願って行う虫送りの際にも、稲の害となる虫は村の西方にあたる庚申の境の外に儀礼的に捨てられる。

広州郡の村、奄尾里の入口にも、庚申と同じく村の入口を守る神(チャンスン)が立っていた。

日本の場合も、韓国の場合も、村には氏神や山神に守られた秩序があり、境界



は道祖神やチャンスンによって守られている。村人は村の中にかぎりは安全であり、豊かな生産と健康を保障されている。

これに対して村の外は、程度の差こそあれ日常の秩序のおよばない危険な場であり、村の悪や穢れ（害虫・害鳥など）の捨てられる場所であると同時に、村に疫病などの悪をもたらす場所として恐れられている。

しかしその一方で村の生活は、時とともに、よどみ、疲れるものでもある。せまく閉ざされた空間に、限られた人々が住んでいる。村人はたがいに良く知り合っているが、それゆえに退屈する。村の秩序は、生活に安定をもたらすが、同時に人々の希望もおしつぶす。村の秩序は昔から決められていて、家柄の低い者は決して人の上にはたてないのである。

こうした村の単調な生活に対して、新しい希望や価値や富をもたらすのは、境界の外側の人々であり、他界はそうした新しい価値の根源となる。

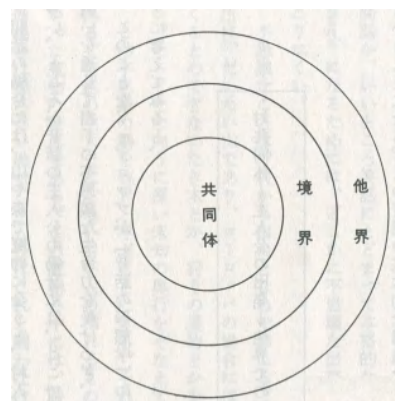
だから日本でも韓国でも、村々は季節の節日に共同体の外側から神をむかえ入れる。たとえば、日本の正月の年神迎えはその一つの典型である。

また神ではなくとも、旅の芸能者や、商人職人も、村に不可欠の娯楽や商品や技術をもたらす大切な人である。こうした人々は、村人だちから大いに歓迎され、重宝がられたが、同時に漂泊民として軽蔑された。彼等は決して村にとどまることはなく、外側の人間として村から出てゆかねばならない運命にある。

このように、他界は聖と穢れ、怖れと希望、富と死といった両義性をもって、共同体の外側にあり、日常空間とするどく対立する。これが共同体に住む人たちの伝統的な世界観（cosmology）である。この生活者の意識が、右の図に示したような村と他界の生活空間のトポロジー（topology）を生み出したのである。そしてこの村人のコスモロジーは、村の生活空間と相似（homology）の物語空間を生み出したのである。

伝統的な村共同体に語り継がれた民話は、村の生活空間と同一の構造を基本としている。だから、民話の主人公がまず村を出なければならない。

民話の主人公は、しばしば貧しかったり、継子であった、怠け者であったり、愚鈍であったり、不具であったりして、村にいて村の秩序に従っているかぎり幸せにはならないのだ。



村の外に広がる他界は、怖ろしく、穢れており、死をもたらすかもしれないが、同時に、超自然的な力との出会いによってすばらしい富や力を与えてくれるかもしれない希望の地でもある。主人公は、主人公であるかぎり、他界の主である超自然的な敵と戦い必ず勝利する。そして今まで村人たちの知らなかった知識や富をもたらすために、再び村に帰ってゆく。

1 境界を守る神：チャンスンとソナン神

その日ぼく達に話を聞かせて下さった孔徳天さん（76歳）によれば、この村の歴史は300年、孔さん自身が下って十代目の草分けの当主である。

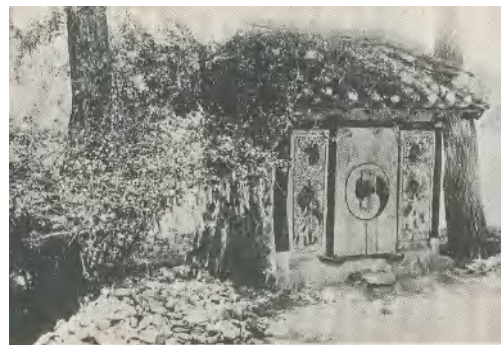
ミラウルが一番大切な祭は、毎年旧暦2月の吉日に行われるチャンスンと山神の祭である。この日村人は朝から山に入り、太い榛の本を伐り倒し、男女二体の新しいチャンスンを作り、村の入口の聖域に立ててお祭をする。そして夕暮になると、今度は選ばれた祭官だけが山に登り、トタン山のほぼ頂上の大きな松の本の下で山の神の祭を行う。山の神を祀るための特別な社や祠はない。

この二つの祭は、ともに村の繁栄と安全を祈願するもので、機能はほとんど同じである。しかしもう少し詳しくみて見れば、山の神は雑鬼を追い払い、病を防いで村を守るだけではなく、作物の豊かな実りを保障する田の神としての性格もあわせもっていることがわかる頃）これに対してチャンスンの役割は、日本の道祖神と同じく塞の神であり境界神としての性格が強い。

境界神といえ、このミラウルの村にはもう一つソナンダン（城隍堂）がある。村の入り口のチャンスンより少し手前にある大木の下に、石がケルンのようにいくつも積まれている。それがソナンダンである。ソナンダンにいつく〈ソナン神〉もまた山神やチャンスンと同じく村を守る神であるが、ミラウルの場合には境界神としての性格が著しい。

孔さんの話によれば、たとえば他村に嫁いだ娘は、里帰りする時についた餅をまずソナンダンに供えてから村に入る。村に魚商人などが訪れる時には、メンタイを一匹ソナンダンの本に縛りつけて入る。村人が河かの理由で商いのために村を出る時も、やはりソナンダンに商いの品を上げてゆくのである。

こうしてミラウルのくっきりとした輪郭が見えてくる。それは地図の示す通りだが、共同体の入口は、チャンスンとソナンダンによって二重に守られている。背後は山に囲まれて、その中心であるトタン山の頂には山神の祭場がある。チャンスンとソナンダン、そし



城隍堂（ソナンダン）に積まれた石。右手は城隍祠。

て山神の三つの神は、すべて村の内側の安全と豊穡を保証する神である。

そして、ここで注目すべきなのは、共同体とその外側との間に介在する境界についての人々の意識である。

たとえば山は、ミラウルの人々にとって大切な生活の場であった。人々はそこで木を伐り、草を刈り、山菜を摘み、四季折々の生活を潤してきたはずである。

しかし山は同時に、虎が出没すると言われ、夜になれば雑鬼の支配する、畏ろしい空間でもある。

ミラウルの人々は、山神の祭場を聖地として木を伐らない。そしてチャンスンの祀られたあたりも聖地であるから、木を伐ることがなく、大木が何本もそびえている。チャンスンの聖地の木々は、神の木々であると同時にトケビたちの棲み家でもある。

2 孔徳天さんの語るトケビ話

その日ぼくたちは、孔さんからトケビの話をつつ聞いた。そのうち二つはトケビと大の玉の話で、それぞれお父さんとお兄さんの経験譚である。二つともよく似ているので孔さん兄さんの話の方を紹介しよう。

ある夜、親戚の家からの帰り道、兄さんが酒に酔って山辺を歩いてくるとトケビの大の玉に会った。逃げて逃げて追いかけてくる。

むかしから火の玉には小使をかければよいと言われているので試してみたが無駄だった。やっとの思いで逃げ切ったところで迎える家族と出会ったというのである。



愉快なのは三つ目の話で、これも孔さんのおじいさんが実際に体験した話として語られている。

むかし、おじいさんが村境のチャンスンのあたりを通ると、夜中すぎなのに1人の大男に相撲を挑まれた。背の高い、電信柱ほどもある男で、おじいさんはへとへとに疲れたけれども、とにかく夜明けまでとって、やっとなそばの大木に縛りつけた。あとになっていってみると、大男の姿はもはやなく、大木には箒に人間の血のついたものが縛りつけられていたというのである。

こうした話は、トケビ譚としては典型的な話で、韓国の人なら誰でも知っている。しかしここで注目しておきたいのはトケビの現れる場所である。それらはいずれも山と村境という境界の領域なのである。

これらの境界は、それぞれ生活に欠くことのできない大切な場でありながら、ある場合には近づきたい畏ろしい場所となる、伸縮自在の両義的な場なのである。これが図にしめした、同心円の境界領域の意味である。

ミラウルの境界について、もう一つ話をつけ加えておけば、同じ孔さんの語ってくれたソナンダンの由来がある。

むかし、ミラウルの娘が嫁にゆこうとした時、嫁を迎えることなくして死んだ若い男の魂が青大将となって、村境の大木の陰にひそんでいた。そしてその娘はその悪霊に襲われて命を失った。ミラウルのソナンダンは、その時以来娘の魂をなぐさめるために大木の下に石を積み、石を積みして出来上ったのだというのである。

これもまた韓国では、なじみのモチーフだが、やはり境が魔物の支配する場であることに留意しておきたいと思う。

3 「黄判書」を読む

さてこの日、孔さんがぼくたちに語って下さった一番大切な話は「黄判書（ファンパンソ）」という昔語りである。ぼくたちは初めて聞く韓国の語りに深い感銘を与えられたが、つぎにこの話を手がかりとして話をもう少し先に進めてみたい。

まず話はこんな風である。

むかし、ソウルに黄判書という人が住んでいた。ある朝、彼は親友の誕生日に招かれて家を出ると、途中できこりに会った。きこりは彼に木を買ってくれと頼むが、彼は断わる。そして判書が楽しい1日をすごし、夕方帰途につくと、また同じきこりに会った。判書はかわいそうに思ったが、再び萌わり、家路をいそぐ。

ところがその晩、判書がふと気がつくると娘の部屋から奇妙な声がする。娘は若くして寡婦となり、判書の屋敷の一隅にひっそり暮らしていたのだった。

判書が、そつとのぞいてみると一人身の娘は身悶えていた。判書は一晩考えて、翌朝さっそくあのきこりを呼びにやり、木をみんな買って家まではこばせた。

そして一緒に朝食をとり、きこりが貧しいながらも立派な人物であることを確かめると、真夜中に駕籠を仕立ててきこりと娘を出発させた。

判書はきこりに手紙を託し、夜が明けて朝食を済ますまで決してこの手紙を読んではいけないと命じた。そして2人が出発すると、判書は家の者を起し、夜中に娘が急死したからと言って、すっかり葬式を済ませてしまった。

一方きこりは、夜が明けて朝食を済ますと、手紙を開いた。手紙には全羅北道全州の某を訪ねるようにと書かれていた。

全州には裁判書の広大な土地があり、きこりは娘と結婚して幸せに暮らした。

その後歳月が流れ、判書の長男は全州の長官となって赴任した。長男は父の指示に従って姉に会い、大変驚いたが、父の深い情愛を知った。



この話は、「むかし」で語り始められ、主人公たちが「幸せに暮らしながら多くの子孫を産み、数日前死んだのできょう葬式を行なったところだ」という言葉で語り納められる見事な形式をもった語りである。

しかし本格民話の中核をなすはずの魔法は一切登場しない。かわりに語りの成立した時代性や社会性、さらには儒教的な教訓をたっぷりと含んでいて、ノヴェラに近い性格を持っている。だが文芸的色彩のきわめて強いこの話も、その構造をながめてみると、魔法民話の場合と同じように、共同体の内側と外側、そしてその境界とのダイナミックな力学によって成立していることがわかるだろう。この話を図①に示した基本型にそって分析してみよう。

まずこの話の出発点にある共同体は、ソウルの黄判書を中心とした上流社会である。この社会は極めて豊かで安定しているが、一つの問題を抱えている。すなわち黄判書の娘は若くして嫁いだが、夫を失いそのために苦しんでいる。当時の上流階級の娘は、寡婦となっても再婚せず、一生を烈女として通すのが婚家に対する礼儀であった。

これは肉体的な苦痛であるが、娘自身にも黄判書にも当面それを解決する能力はない。プロップは、物語の出発点に提示される問題の一つを欠如と呼んだが、この場合の娘の苦悩はそれにあたる。

たしかに黄判書の娘の悩みはきわめて現実的で魔法民話には、あまり例はないが、ちょっと視点をずらせば、民話には判書と同じように娘の苦悩や病いに悩む父親のモチーフは山ほどある。

たとえばヨーロッパのメルヘンに頻出する「笑わない娘」「結婚したがらない王女」「眠れる美女」などを思い出してみればよい。

こうした場合、困り果てた父親は娘の苦しみをとりぞいてくれる者を見つけるために国中に布告を出す。すると主人公が、思いもかけない所から現れる。それはたいがい王と娘の構成する共同体の外側の周辺の小さな村から<異人（ストレンジャー）>としてやって来る。

「裁判書」の場合には、もちろんこうした主人公の劇的な登場はない。問題を解決するのは判書自身の知恵である。しかし、この解決に際して、きこりの果す役割を忘れることはできないだろう。いかに判書が知恵者であっても、この場合きこりの援助なしには、娘の苦境を救うことはできない。

そしてこの際もっとも大切なことは、きこりが黄判書とその娘の構成する共同体（ソウルの上流社会）の外側の人間であるということだ。黄判書は、共同体の外部との接触によって初めて問題を解決することができるのである。

民話の冒頭に発生する難題や欠如は、外側からやって来たふしぎな力をもった主人公自身の働きによって解決される。韓国の民話にその典型例を求めれば、たとえばKT281の「金の鈴」がそれである。

この物語の場合には、主人公の3人兄弟は死んだ母親のくれた金の鈴の力によって、中国王の姫の病いを癒し、姫と結ばれて、王の死後新しい王になるのである。

これに対して「黄判書」のきこりには、主人公の役割が与えられていない。彼には外側

の人間の持つ、独自の問題解決力はあるが、それが発揮されるのは、あくまで黄判書の老練な知恵を通してである。

「黄判書」の場合に娘の苦痛をとりのぞいた若者は、娘と結ばれて幸せになるが、その働きの受動性のゆえに町から出てゆかねばならない。

民話の多くの主人公が王の娘の病いを癒すと、そのまま城にとどまり王の後を継ぐのとは対照的である。若者の働きのこうした受動性と、民話の構造の歪みはどうして起こるのか。

4 「黄判書」の構造

これがミラルの話としての「黄判書」の問題の一つだが、この問題に答える前にきこりのもつ異人性と物語の時間・空間構成についてもう少し踏み込んで考えてみよう。

この視点からみた時まず注目しなければならないのは、物語構成上は小さなエピソードだが、裁判書がきこりと会う時間である。判書がこの若者と会うのは早朝と夕暮れ、いずれも昼と夜との境界の時間である。

村はずれの〈境界の空間〉にはトケビのような妖怪がしばしば現れるが、昼と夜との〈境界の時間〉もまたこうした不思議を秘めた異人の立ち現れる時間なのである。もちろんこれだけのことでは牽強付会に近いが、ここにもう一つこの話の類語を價ね合わせると問題はもっと明確になってくるだろう。

その類語とは、鄭寅燮の『オンドル夜話』58番にみられる「若い寡婦」である。

この話の場合も主人公はソウルに住む高官で、その娘は寡婦である。主人公は娘の悩みを解決する為に、召使いを呼び、ソウルの南大門に宿をとり、朝、鐘路の鐘がなり門が開いた時に一番最初に入って来た独身の若者を連行するように命ずる。

この若者がまさに「黄判書」におけるきこりの役割をはたすのである。鄭寅燮のこの話は、孔さんの語りに比べて再話的色彩がかなり強いが、このエピソードは考慮にあたいする。

この物語の場合、政府高官の大切な娘の運命は、まったく偶然に、夜明けという境界の時間に、市の大門という境界の場所へ外側からやって来たというただそれだけの理由で、見知らぬ若者の手に委ねられるのである。これほどの倫理と道徳と教訓を背景に背負った物語には、ふさわしからぬことである。

しかしよく考えてみれば、民話にふらりと登場する主人公の若者に、なにか確かな素姓のあったためしは少ない。たとえそれが王子のような高貴の血筋の者であっても町や村を訪れる時には、たいがいボロをまとっていて、みるからに風采が上らない。

この場合ただ一つ大切なことは、彼が外側の、ストレンジャーのシルシを身につけていることである。そしてこの物語の場合には、若者が境界の時間に、境界の空間に立っていたということは、彼が間違いなく〈不思議な力をもった異人〉であることの証拠なのである。

「裁判書」の場合の若いきこりは、これほど強烈なシルシを身につけていなかった。しかし彼は三度にわたって、境界の時間に登場する。

しかもまた彼が辻に立って薪を売っていたことも大切である。辻こそ共同体の中の境界の空間なのである。こうした時間と空間の設定は、おそらく無意識のうちに話者を支配し

ている不思議な世界の仕掛けなのだと思う。

「黄判書」の物語には、昼は登場しない。不思議な出会いは、いつも境界の時間におこる。

しかしもう少しくわしく見れば、決定的な事件は真夜中におこる。まず黄判書が娘の苦悩に気づくのが夜半である。そしてもっと決定的には、その娘ときこりを罵龍にのせて町の外に送り出すのが、真夜中である。

しかしなぜ真夜中なのか。それはもちろん、人の目を忍ぶためであるにちがいない。娘を共同体から外部へ送り出してしまうには、人目を避けなければいけない。この秘密が守られることが、物語の鍵である。

だがさらにその根源を問えば、夜がいわば非日常であり、カオスの時であるからという答えが返って来る。夜が昼とは違って<反秩序>の時であればこそ、烈女であるはずの娘が欲望に身をゆだね、カオスを現出するのである。

またその夜の闇のゆえに為政者であり、秩序の体現者である黄判書は、私情にまかせて娘を救済するのである。

黄判書が、自分たちの支配する共同体のはるか彼方にある全州に向って娘を解き放つのは、この時である。夜は、昼のあるべき秩序に支配されたコスモスに裂け目を入れる。判書は、この裂け目を利用して、2人を他界へ出発させるのである。

そしてこの闇は、一方において逃れて行く娘を包む保護の機能を果すが、同時に2人を暴力的に葬る死とも等価である。判書が消えた娘を死と偽り、贗の葬儀によって葬り去ることに成功するのも、この闇のおかげである。周知の通り、男と女の愛のもつれ（別の言葉で言えば、リビドーの過剰は抑圧）は、しばしば心中、あるいは殺人といった死のドラマを引きおこす。

「黄判書」の場合には、幸いにして主人公の知恵の働きによって問題が解決された。しかし、もし判書に知恵がなければ、彼も娘も欲望の果に闇の暴力を選んでいたかもしれない。その意味で判書の選んだ解決が娘の贗の死という仕掛けに支えられていることは、きわめて象徴的であると言える。

闇は昼の論理では処理することのできない問題にしばしば解決を与えるが、その手口はまたしても両義的である。闇のカオスの中では、保護と暴力とが等価なのだ。

「黄判書」の場合には、若い2人はこの闇を無事にくぐり抜ける。するとまた境界の時間が待っている。夜明けである。すでにソウルの町を十分に離れて、（しかしまだ引き返すこともできる境界の地点で）、2人は朝食をとり、黄判書の手紙を開く。すると2人の幸せも開かれる。

二人の向う全羅北道全州は、ソウルから遠く隔ったもう一つの共同体である。きこりはそこで娘を妻とし、広大な土地を手に入れ、支配者となる。さきに紹介した鄭寅燮の類話では、この地が嶺南の慶州とされ、ソウルの生活のまったくのコピー、いわばパラレル・ワールドになっているのは面白い。つまり娘の弟が国王直属の御使（オサ）としてこの地を訪れてみると、ソウルの自分の屋敷とすっかり同じ建物がたっている。屋敷をおとずれると家具調度、食器に至るまで同じものが揃っている。弟はそこで初めて姉の消息と父の計画を知るのである。

5 パラレル・ワールドの2つの王国

ここでふと文化人類学がよく取り上げる、双分的な都市構造のことを思うのだが、それは行きすぎだろうか。ちょうどアフリカのダホメの古い王国時代における首都アボメとカナの関係のように、ソウルと古都慶州があり、そこにそれぞれ同じ形の屋敷がある。いうまでもなく、慶州の姉の家は他界的な性格をもっている。父の計略によって偽似的な死をとげた姉は、もともと他界の人である若者の案内によってこの地に至り、若者と結ばれてこの地の支配者となった。ちょっと出来すぎた話である。

「黄判書」の場合には、こうした正確なパラレル・ワールドは用意されていない。しかしきこりは、ソウルの上流社会にとどまって、その新しい支配者となるかわりに、もう一つの共同体である全州の中心に位置し、妻と幸せな日々を送っている。これもやはり現実の向う側の鏡の中の世界でのことであると思う。

民話に託された幸せな婚姻と致富の夢を映し出すために、他界の側に用意された鏡の中の出来事である。

以上の構成を、プロップの形態学を援用しながら、整理してみよう。

まず初めの状況として共同体に一つの難題が示される（娘の苦悩）。共同体自体には、この問題を解決する能力がない（黄判書の驚きと苦悩）。

つぎに解決のために外側から見知らぬ人が導き入れられる（きこりの招待）。

主人公（＝黄判書）はこの異人の協力を得て問題を解く（娘の偽似的な死）。異人は娘をともなって共同体を去る。

異人と娘は、もう一つの共同体に赴いて結婚する。

これを、〈共同体〉と〈他界〉という場所論（トポロジー）的な対立図式にあてはめて定型化してみると、

他界からの異人の出現→共同体内部の主人公と異人との協力による問題の解決→異人の他界への回帰→他界に映し出されたもう一つの共同体での娘と異人の幸せな結婚

という形になる。

この図式は、最後の結婚の要素を場所論の立場から切りすてて、〈他界→共同体→他界→もう一つの共同体〉とさらに抽象度を高めてしまえば、図式はさらに普遍的な地位を獲得して、きわめて多くの民話に適要されるパターンとなるだろう。

6 語り手の世界観と語りの構造

しかしここでは、この抽象的な図式から、もう一度「黄判書」にもどり、ミラウルの語り手の世界観との関りの中で、この構造の意味を考えてみよう。

すでに述べたように、語りとしての「黄判書」のもっとも大きな特徴は、判書の知恵である。判書は時の政府の高官であって、昔話の構造的な理解からすれば王にも等しいコスモスの中心に位置する人物である。

通常のお話は、王が問題にゆきづまったところから話が始まる。そしてそこに見られぬ

若者が登場し、問題を解決し、王の娘を手に入れて、新しい王になる。話の構造的な中心はこうした地位の交代・変革にある。

しかし、この物語の場合には、知恵を働かすのは中央の為政者であり、物語が終っても中央の共同体にはなんの変化もみられない。

こうした為政者自身が知恵を働かすパターンは、昔話としては特異だが、もちろん韓国の昔話全体の特徴ではない。むしろきわめて限られた型の話である。それは韓国に広く分布している巧智譚の主人公をみればわかる。彼らのほとんど全ては、下男であり、愚か者であり、貧しい商人や炭焼であって、権力者や金持の愚行を暴き笑いのめしている。

しかしそれでは、孔徳天さんの語る「黄判書」の構造の意味はどう読みとったらよいだろうか。そこにはまず、ソウルの上流社会に対する語り手の理解が反映されていると考えてもよい。

そこには、ソウルに代表される〈中心〉で繰り広げられる政治的な駆け引きは、あまりに洗練されすぎていて一介の薪売りの若者が介入する余地はないという語り手と聞き手の意識が働いているように思われる。

しかしこの見方をもう一步さかのぼってみると、庶民の〈中央〉に対するきわめて素朴な信頼が見えてきはしないだろうか。

すなわち、黄判書に代表される〈中央〉は、まだ十分に知恵と慈愛に満ちていて、危機に際しても自己を癒す力をそなえているという信頼である。

もちろん問題の解決のためには外部の力の介入が必要なのだが、その力も昔話としては最少限に抑えられているとあってよいだろう。

こうした力学の歪みが、もう一つのユートピア的な共同体（全羅北道全州）での幸せな生活を生み出すのだが、これもまた言わば〈中央〉の側の慈悲の産物とされているのである。

ぼくは、もちろんこのような中央信頼型の「昔話の世界観」を孔徳天さんという「語り手の世界観」にストレートに結びつけるつもりはない。

7 もう一つの語り：「金政丞と李政丞」

しかし、ここで同じ孔さんが語「金政丞と李政丞」という話を重ねあわせると、さらに興味深い語り手と語りの関係がみえてくる。

これは、金政丞と李政丞という2人の政府高官の友情物語で、つぎのように要約される。

むかし、ソウルに金政丞と李政丞という2人の仲のよい友人が住んでいた。ある時、金政丞は何かのあやまちで罪を負い、江原道春川のヌリ峠に配流された。金政丞はそんな逆境にありながらも、明るく子供を育て、学問に励んだ。李政丞もそんな金政丞に対する友情を失わず、むかしの約束にしたがい娘を彼の息子に与えた。

娘は息子によく仕え、ついに息子は科挙に最高点で合格し慶尚監司となったという。

この話は、もちろん構造的には「黄判書」とは、まったく別のタイプの話である。しかし一点、江原道春川というソウルから遠く離れた別天地での生活は注目に値する。

ここでの全政丞の暮らしはきわめて貧しく、全羅北道全州におけるきこりの暮らしには

比すべくもないが、明かるく活気に満ち、何よりも学問による切磋琢磨がある。これはやはり清貧を旨とする儒教的倫理に照らしてみれば、一種のユートピアである。しかもこのユートピアはソウルという中央と対峙する形で設定されながら、しかも中央を拒否することなく、いわば中央の知恵と慈愛を認め、中央に回帰する志向を核として成立している。

その点では、「裁判書」の全羅北道全州ときわめて近い構造を有しているのである。

そしてこの「金政丞と李政丞」のユートピアの構造をさらに語り手の孔徳天さんの始祖伝承と重ね合わせてみると面白い。

孔さん自身の語りによれば、この村の始祖は今から300年ほど前、国から孔の苗字を賜った偉い役人であったが、何かの罪で釜山に配流された。先祖は辛抱がよく、少しづつ部に近づき、ついに広州郡奄尾里に至って居を定め、土地を拓いた。孔徳天さんは、下って十代目の草分け筋であり、そのことに強い誇りを抱いている。ぼくはもちろん深い確信はもてないけれども、トタン山に登って明かるいミラウルの村を見下していると、ここが一つのユートピアに見えてくる。

現在の奄尾里は、ソウルから最も近い伝統農村と呼ばれ、一部観光地化する気配さえみえている。しかしその伝承が事実であるか否かを別として、配流された始祖の伝承を抱いて、遠くソウルを望みながら民話を語る語り手の想像力の核に、この村があることは間違いはあるまい。

金政丞は幸いにして息子の教育に成功してソウルに帰っていったが、流浪の果に清貧をつらぬきながら空しく倒れていった人々も多くあったはずである。孔さんの話に登場する江原道春川、全羅北道全州と同じく、広州郡奄尾里もソウルという中央と対峙しながら、中央を拒否せず、中央に回帰する夢を語る共同体であり、孔さんはその草分け筋として共同体の中央にいる。

こうした語り手の意識のトポロジーが、語りのトポロジー（他界→共同体他界）に働きかけ、くもう一つの共同体における幸せな結婚という奥行きを生み出したと推測することは、それほど難しいことではないように思われる。

8 まとめ

すでに述べたとおり「黄判書」は、口承文芸のジャンルでいえばノヴェラに近い文芸的色彩の強い物語である。そこには、本格民話にふさわしい魔法の要素が欠如している。

しかし、それをさらに注意深く見れば、話の展開の決定的な場面に共同体の外側との接触が折り込まれていることがわかるだろう。

そしてその外側こそ、物語の語り手である内側の人間にとって未知の領域であり、不思議な力（＝魔法）の根源なのである。この外側の、もう一つの世界を「他界」と呼べば、すべての魔法民話に共有されるトポロジックな構造が見えてくる。

他界というふしぎな場所は、く富と死く憧れ



と怖れ」という両義性をはらみながら、民話を語る人々の共同体をひしひしととり囲んでいる。

それは、けっしてはるか彼方にあるのではない。他界の住人は、いつ村を訪れるかわからない。ミラウルのソナンダンやチャンスの神は、村の入口に立ち、じっと他界に目を凝らし、彼等の悪意の侵入を防いでいる。

しかし同時にこうした境界こそ、神の依りつくふしぎの場所でもある。二月の吉日に山神をまつり、チャンスの神に祈りをささげる時、神は確かに降臨し、村人の願いをききとどける。そしてこの祈りの場は聖地であり、祭以外の時にも村人は決して木を伐らない。みだりに本をきる者は、おそろしい神の怒りに触れるのである。

しかしさらにこの聖地は、夜の闇とともに、悪意ある鬼神の支配する場ともなる。ミラウルの人たちが、畏怖と諧謔を交えて語るトケビの出現するのも境としての村の入口や山なのだ。

ぼくはここでもう一度、(1) 語りの場としての村と (2) 語り手の世界観と (3) 語りそのものの世界とのトポロジックな構造の基本的な相同性」を指摘することで、小論を終りたいと思う。

韓国においても日本においても、民話のふしぎの場は同じ仕掛けに支えられて人々のうちに生きている。外側という他界からやってくる異人を畏れ、待望する村の心性が「黄判書」というノヴェラを成立させているのである。ソウルからほど遠くない奄尾里ミラウルという村に立って、こんなことに思い至った。

これは、「専修人文論集・38号」（1986年7月）に収められた「他界と共同体」に加筆したものです。